

## フランス語のリズムグループは アクセントの基本単位か？

*Le groupe rythmique est-il une unité de base de l'accentuation?*

菊 地 歌 子  
KIKUCHI Utako

Le groupe de mots dont la dernière syllabe est accentuée est appelé le plus souvent "groupe rythmique". Les manuels de phonétique ne fournissent pas de règle suffisamment précise pour que les apprenants puissent découper les phrases en des unités d'une longueur appropriée. Il faut distinguer le groupe d'accent, unité minimale indivisible et le groupe rythmique, phénomène prosodique et variable selon les conditions dans lesquelles s'effectue la lecture.

### キーワード

リズムグループ (groupe rythmique)、アクセント (accent)、統辞構造 (structure syntaxique)、記号素 (monème)、品詞 (partie du discours)

### I. はじめに：

フランス語の学習者に最近見られる大きな変化は、なめらかなイントネーションで、かなり速く話せる人が急増したことである。この現象は、言うまでもなく、運用能力重視の外国語教育法の普及によって、ネイティブの教師が増加し、音声教材が日常的に使用されるようになったことの成果である。しかし残念なことに、学習者の発音は、流暢ではあるが、必ずしも聞き手にとって分かり易い発音ではないという傾向がある。

フランス語のイントネーションは、周知のように文中の意味の単位の境界では上昇パターン、文末では下降パターンとなる。P. Léon (1997, p.87-98) は、音程のパターンを4段階の音程変化で解説し、M. Grammont (1966, p.151-176) は、実測したデータに基づき、イントネーションのパターンについて詳細に解説している。しかし意味の境界表示機能 (fonction démarcative)<sup>1)</sup>を持つのは、アクセントであり、イントネーションは、音量、長さとともにその構成要素のひとつでしかない。文が適度な長さに区切られ、そこに明瞭なアクセントが置かれることで、聞き手にとって分かり易い発音となる。イントネーションの指導においては、学習者が文のどこに境界を置いて、ひとつのイントネーションパターンとするかを知ることがかりを

与えることが重要であり、そのためには、アクセントを置く位置の基準を、学習者に提示することが不可欠である。音声学の解説書では、この点への言及は十分ではない。

一方アクセントなどの、プロゾディーに属す音声現象は、大型コンピュータによって本格的に行われるようになった比較的新しい研究テーマであるが、プロゾディーと文の構造や意味との対応関係については、音響工学の分野でいろいろな言語を対象に研究が行われている<sup>2)</sup>。現在では外国語教育に応用できるデータが豊富に提供されている。

本稿では、アクセントを置く位置に関して、学習者がある程度の長さの文を音読する際に、手がかりとなる基準を提案する。まず伝統文法を基にアクセントを置くことのできる単位を定義し、それを絶対的な最小単位とする。次に、プロゾディーに関する研究を参考にして、実際に音読をする際の標準的なリズムグループの切り方を検証する。この段階では、文の構造以外の外的要因が関与するため、状況によって、アクセントの置き方が大きく変化するが、学習者にとって目安となる実践的な基準を提案することは不可能ではないと考える。

なお、生成文法に関する用語は、著者によって微妙に異なるため、引用部分以外では、A. Martinet, H. Walter (1969): アンドレ・マルチネ『言語学事典』, 三宅徳嘉監訳, 大修館書店, 1994に準拠する<sup>3)</sup>。伝統文法で使用されている用語に関しては、朝倉秀雄 (1995, 1998)『フランス文法辞典』白水社を参考にした。

## II. アクセントのある単位

### I. 1. 名称と定義の問題点

アクセントで境界表示をされた単位は、著者によって定義の基準が異なり、非常に多くの名称が使われている。

#### 1) アクセントのある単位そのものに注目した名称

unités accentuelles<sup>4)</sup>

groupe accentuel<sup>5)</sup>

groupe phonétique<sup>6)</sup>

#### 2) 文のリズムに注目した名称

élément rythmique<sup>7)</sup>

groupe rythmique<sup>8)</sup>

séquence rythmique、unité rythmique<sup>9)</sup>

3) 息継ぎのある場合の名称

groupe respiratoire

groupe de souffle<sup>10)</sup>

4) イントネーションの音響上の変化の分析に関係する名称

tronçons intonatifs<sup>11)</sup>

5) 意味の単位との一致を重視した名称

groupe sémantique

unité de sens<sup>12)</sup>

以上の音声現象に基づいた名称に対し、M. Grevisse<sup>13)</sup>はこのような「音声上のグループ (groupe phonétique)」単位を、「意味<sup>14)</sup>の最小単位 (une seule unité de sens)」と定義する。この定義によれば、この単位は、語数に関わらず、それ以下の小さな単位に区分すると、意味が失われる、あるいは意味が変化するような単位である。

(1)<sup>15)</sup> a. Une belle ferme / le voile.

b. Une belle / ferme / le voile.

(1)の例では、aのune belle fermeを1つの単位とすれば「美しい農場」の意味になり、bのようにune belle / fermeの2つの単位に分ければ「一人の美女が～を閉じる」の意味に変化する。またa, bいずれの場合も、le voileの部分でle / voileに分けると、voileの「意味」に変化は起きないが、leは、a. では直接目的語人称代名詞、b. では冠詞であり、いずれにしろ「機能」はあるが「意味」を持たず、「意味の単位」にはならない。

以上のように、M.Grevisseの定義によれば、その最終音節にのみアクセントを持ち、それ以外の音節にアクセントが置かれることのない意味の単位が存在する。ところが、P. Léon(1997. p.31)<sup>16)</sup>は、アクセントで区切られた単位は、“unité de sens”であり、“une unité grammaticale, appelée *syntagme*”と一致する単位であるとした上で、この単位(groupe sémantique ou groupe rythmique)が長い場合、意味の境界表示をする主アクセント (accent principal) の他に、副アクセント (accent secondaire) が現れることを強調している。確かに(2)の例ではa. のLe père de Max 程度の長さでは1単位として発音されるが、b. c. では2単位となる可能性が高い。

(2)a. Le père \* de Max / est parti / en vacances.

b. Le grand-père \* de Max / est parti ...

c. L'arrière grand-père \* de Max/est parti...

ただし、

／＝アクセントのある意味の境界

\*＝副アクセントが可能な意味の境界

この「不可分であるはずの単位の中の副アクセントの存在」という矛盾を解決し、名称と定義の関係を整理するためには、アクセントで境界を印された単位を、少なくとも2種類に分類し、それぞれを改めて定義する必要があるだろう。

## Ⅱ. 2. アクセントグループとリズムグループ

フランス語の通常アクセントは、ストレスアクセントではなく、強勢アクセント<sup>17)</sup>であり、「一語または語群の音節のどれかに特別な力を入れることで成立する」<sup>18)</sup>。ある単語が単独で発音される場合、アクセントは(3)のように、その単語の最後の発音される母音に置かれる。しかしアクセントは、全ての語に常に置かれるのではなく、文中においては非強勢化の現象によって、アクセントが失われることがある ((4)の例では、各語が単独で発音された場合に、アクセントは、IL, laiSSA, SON と置かれる)。

(3) QuesTION, calamiTE, invenTAIR(e)<sup>19)</sup>

(4) Le garÇON a manGÉ des gâTEAUX.

このように文中においては、非強勢化しない語を中心として、いくつかの単語が結合され、グループが成立する。このグループは、最後の音節にアクセントが置かれ、それ以外の音節にアクセントが置かれることのない、不可分の単位である。この単位を、Groupe d'accent (アクセントグループ、以下 Gr.A.) と呼ぶこととする。

一方、実際に文を音読する際には、文を「長すぎない程度のグループに区切ることで、発話 (énoncé) を分かり易くする」<sup>20)</sup> 必要がある。Gr.A. 毎にアクセントを置いたのでは、単位が短すぎて全体が把握しにくい。またあまり多くの Gr.A. をつなげて、単位が長くなりすぎても、意味の基本要素が浮き彫りにならない。このように音読 (または発話) において、いくつかの Gr.A. が連結されて実際にアクセントで境界を区切られた単位を、Groupe rythmique (リズムグループ、以下 Gr.R.) と呼び、Gr.A. と区別する。III では Gr.A. を文の構成要素によって定義することを試る。

### III. Gr.A.の成立条件

#### III. 1. Gr.A.の核になる品詞

Gr.A.を確定するためには、核になる語が何か、を明らかにする必要がある。P. Fouché<sup>21)</sup>は、文中でアクセントを担う可能性のないものとして、以下の品詞を挙げている。

- (5) 1 Les articles
- 2 Les adjectifs démonstratifs
- 3 Les adjectifs possessifs
- 4 Les adjectifs relatifs
- 5 Les adjectifs indéfinis: *aucun, autre, certain, chaque, auquel, à laquelle, etc.*
- 6 Les pronoms personnels sujets: *tu, il, ils* ou compléments *me, te, se.*
- 7 Le pronom indéfini: *l'on*
- 8 Le pronom relatif
- 9 Le pronom interrogatif neutre: *que*
- 10 Les prépositions: *à, de, par, pour, sur, etc.*

しかしながら位置によっては上記のリストにある語でもアクセントを担う場合がある。たとえば、人称代名詞では、aの用法では動詞の前に置かれるためアクセントを担うことはないが、bではアクセントを担う。

- (6) a. Il travaille.
- b. Travaille-t-il?

(7)の関係代名詞の場合も、aではアクセントを担わず、bではアクセントを担う位置にある。

- (7) a. Prenez la chaise qui est là.
- b. Heureux qui, comme Ulyse, a fait un bean voyag.

上記のリストの語の中にはアクセントを担う可能性を持つものはある。しかし文中においてその語が単独でGr.A.を作ることはありえない。

たとえば、(5)のリストには挙がっていないが、指示代名詞の場合、(8)のように、“ce”がアクセントを担うことはあるが、単独でGr.A.を成立させる場合には、(9a)のような“ce”の使い方はで

きず、(9b)のように、“cela, ceci, ça”などの複合形や強勢形を使わなければならない。

(8) Sur ce, je termine...

(9) a. \* Je vais prendre / ce.

b. Je vais prendre ceci (cela, ça).

P.Fouché のリストは、文中で単独でアクセントのある単位を成立させることのない品詞、つまり Gr.A.の核にはならない品詞のリストである。従ってこのリストにない品詞は、Gr.A.の核に成りうるものであり (以下「核になる語」と呼ぶ)、その主なものは、名詞、動詞、形容詞、副詞である。

### Ⅲ. 2. 意味を持つ語

Gr.A.が「意味の最小単位」であり、不可分な単位であるなら、「意味を持つ語」が一つある毎に Gr.A.が一つ成立することになる。そして意味を持たない語は、関連の深い、核になる語の Gr.A.に統合される。意味を持つ語と、そうでない語の分類は、伝統文法では、語彙と機能語(文法語)に集約される。この分類に近い考え方としては、記号素の分類がある。記号素(monème)は、語彙素(lexème)と機能素(morphème)とに分類される。語彙素は「伝統的には意味を持つものと考えられ<sup>22)</sup>」、広義の「意味」的内容を持ち<sup>23)</sup>、語彙の中に位置づけられる。そして、B. Pottier (1974) は、「lexème は語彙範疇素 2 クラスのうちの一方の要素 (形態素レベル)、非有限で開かれた集合に属す<sup>24)</sup>」と解説し、A. Martinet<sup>25)</sup>は「語彙単位は、要素数の限られない、つまり開かれた目録に属するものとみなされる」と定義している。記号素の概念は、いわゆる単語には対応しない。しかしながら、分類の基本単位をアクセントの基本単位である「語」とすることで、伝統文法の品詞分類と、目録の概念を対応させることが可能になる。

### Ⅲ. 3. Gr.A.の確定方法

伝統文法の品詞の中で、開かれた目録に属すものは名詞、動詞、品質形容詞、副詞であり、表 1 に示したように、核になる語と一致する<sup>26)</sup>。この 4 種類の品詞が核となり、Gr.A.が成立する。学習者は文中の上記 4 種類の品詞を探し、それ以外の語をそれぞれに関連の深い語のグループに統合することで文を Gr.A.に区切ることが出来る。この作業は学習者にとって決して難しいものではない。以下に具体的な例を示す。

フランス語のリズムグループはアクセントの基本単位か？（菊地）

表1 アクセントグループの核となる品詞項目

品詞		アクセントグループの核になる可能性	開かれた目録に属す	
名詞		○	○	
	品質形容詞	○	○	
	指示形容詞	×	×	
	所有形容詞	×	×	
	動詞	○	○	
形容詞	数形容詞	×	×	
	不定形容詞	×	×	
	疑問形容詞	×	×	
	関係形容詞	×	×	
副詞	様態の副詞など	○	○	
	その他	△	△	
代名詞	人称代名詞	強勢形	○	×
		非強勢形	×	×
	指示代名詞	強勢形、複合形	○	×
		非強勢形	×	×
	所有代名詞	○	×	
	不定代名詞	○	×	
	疑問代名詞	○	×	
関係代名詞	×	×		
冠詞		×	×	
全置詞		×	×	
接続詞		×	×	

● 名詞と動詞

(10) のように、まず動詞と名詞を特定し（下線部）、その上で核にならない語を統合して Gr. A. を確定する（二重線の単位）。

(10)<sup>27)</sup> Le père de Max et la soeur de Maurice sont partis en vacances dans le sud du Mexique.

● 形容詞

伝統文法では、形容詞の fonction（職能）を付加形容詞（11a）、属詞（11b, c）、同格（11d）に分類する。いずれの fonction の場合も、品質形容詞は Gr. A. の核となりうる<sup>28)</sup>。

(11)<sup>29)</sup> a. Le garçon a mangé des pommes vertes.

- b. Le garçon était assis.
- c. Elle tenait les yeux ouverts.
- d. Le soldat revenait de la guerre, glorieux.

● 副詞

副詞は様態 (12 a)、時 (12 b)、場所 (12 c) の副詞以外は、種類によって個別に判断する必要がある<sup>30)</sup>。

- (12) a. Il chantait joyeusement.
- b. Il travaille aujourd'hui.
- c. Il a voyagé partout.

こうして確定した Gr.A は、あくまでも最小の基本単位であり、決して、その境界にアクセントを置かなければならないという単位ではない。あくまでも、この単位の最後の音節以外にはアクセントを置いてはならない、という単位である。従って、この単位はこれ以上分割することはできないが、複数の Gr.A.が統合されて一つの Gr.R.を構成することは可能である。

次の段階は、適切で、聞き手が文の意味を把握し易い長さに文を区切って発音する準備である。そのために 1つの Gr.A.で Gr.R.とするのか、あるいは複数の Gr.A.を連結して Gr.R.とするのかを、判断する必要がある。たとえば (13) は、上記の例文 (10) を標準的な Gr.R.で区切った例である (/は Gr.R.の境界線の位置)。

- (13) Le père de Max / et la soeur de Maurice / sont partis en vacances /  
dans le sud / du Mexique.

いくつの Gr.A.を連結するか判断には、その文の統辞構造が決定要素となる。IVでは、文の構造と韻律が密接な関係にあるという前提のもとに、生成文法の樹形図で示される句構造と Gr.A.との対応関係を、Gr.R.の確定に利用することを提案する。

#### IV. 文の構造と韻律

##### IV.1. 句読点と韻律

統辞構造と韻律の関係が最も明らかになるのは、句読点のある境界であり、息継ぎやポーズの殆どは、句読点を反映している。文末の境界に関して A. Martinet<sup>31)</sup>は、旋律的な基準を文の定義の基本にするのはあまりにも紛らわしいとしながらも「文の終わりには音調の面で平叙文



においてまさに旋律曲線の降下点のようなものとして記述される何物かが起きるのは確かである。そこでは最大限の休止 (pause) あるいは発音器官が活動停止に戻る事 [...] が問題であると予測することができる」ことを認めている。

さらに句読点と韻律の関係は、いくつかの実験で明らかにされている<sup>32)</sup>。特に詳細な実験を行った P. Bhatt<sup>33)</sup>は、文末のアクセントは音程が下がることで明瞭な特徴があり、point (ピリオド) のある境界は、文字と音声とが100%一致することを報告している。また virgule (カンマ) のある境界の81%がプロゾディーに反映され、ポーズの97%およびイントネーションの大きな変化の94%が何らかの句読点を反映することを明らかにしている。

この実験は、訓練を受けた被験者を対象としており、理想に限りなく近い状態のサンプルに基づいている。一般の被験者の場合の対応関係はこれほど高くはないと予想されるが、それでも高いパーセンテージが得られることは確実であろう。

## IV. 2. 文の構成要素と韻律

### IV. 2. 1. 比較的単純な構造の文の場合

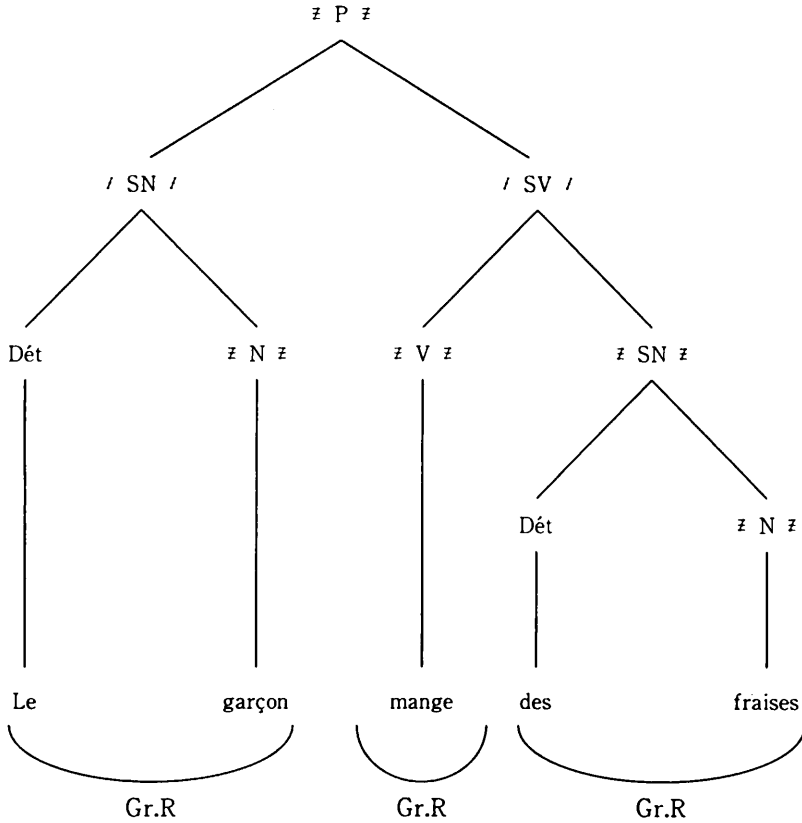
句読点のないところでの Gr.R.は、文の主語・動詞などの構成要素の境界と無関係ではあり得るだろうか<sup>34)</sup>。統辞構造とアクセントの関係について F. Carton は、アクセントの位置と syntagme<sup>35)</sup>の境界には潜在的な一致の可能性はあるものの、実際には必ずしも一致しない場合が多いとしている<sup>36)</sup>。確かに自由な発話は、発話行為と文の構築作業とが同時進行し、完成した文の構成要素との関連は把握しにくい。しかしながら、F. Wioland は、7時間の録音資料を分析し、「フランス語の文の最小統辞構造を詳細に調べた結果、統辞構造とリズムグループの関連が観察された」と結論づけている<sup>37)</sup>。さらに M. Rossi<sup>38)</sup>らは、イントネーションの構造 (structure intonative) と統辞構造 (structure syntaxique) との密接な関係を確信し、詳細な実験・調査を行った。

以下の図は、M. Rossi らの、(14)の統辞構造を示した樹形図に Gr.R.を追加したものである。

(14) Le garçon / mange / des fraises.

この実験の対象になった文は、句読点もなく、長い syntagme も含まれず、樹形図が2つの階層で成立する単文を対象としているため、Gr.A.と Gr.R.が一致する。

図1 syntagme と韻律境界の関係



(Mario ROSSI 他(1981) p.282 Figure 55- indicateur syntagmatique de la phrase de base: "Le garçon mange des fraises".より)

ただし、

P (phrase) <sup>39)</sup> = 文

SN (Syntagme Nominal) = 名詞句

SV (Syntagme Verbal) = 動詞句

Dét (Déterminant) = 限定詞

N (Nom) = 名詞

#### IV. 2. 2. 二つ以上の Gr.A.が Gr.R.となる場合

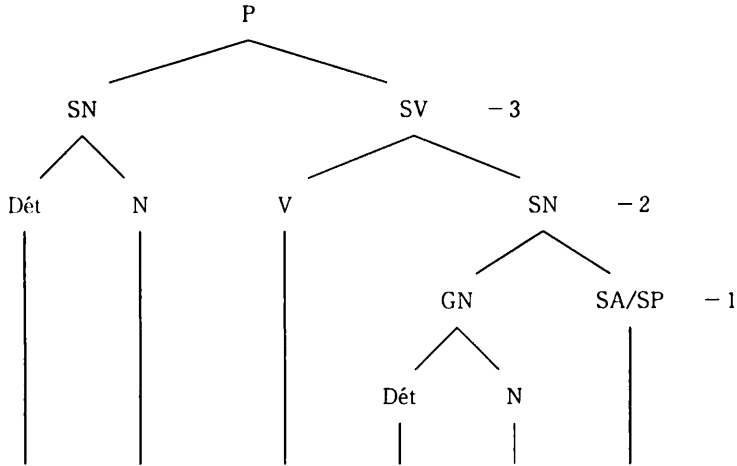
(15) (16) の樹形図は、動詞句の構成要素である名詞句が、さらに構成要素に分かれ、3階層の樹形図となる。(15) の "pommes" は「りんご」という意味であり、"terre" は「地面」を意味する。図2の樹形図では、終端結節1のレベルにある "pommes" と "de terre" の二つの Gr.A.が連結して、2のレベルで "des pommes\* de terre" という Gr.R.が成立する。同様に (16) は "pommes vertes" (あおりんご) という意味で、名詞と形容詞は、1つの Gr.R.と

して発音され、Gr.R.が成立する。

(15) Le garçon / a mangé / des pommes \* de terre.

(16) Le garçon / a mangé / des pommes \* vertes.

図2 2つ以上の Gr.A. が Gr.R. となる場合<sup>40)</sup>



Le garçon / a mangé / des pommes \* vertes.

Le garçon / a mangé / des pommes \* de terre.

ただし、

GN (Groupe nominal) = 動詞グループ

(Déterminant) と N (nom) の支配結節のラベルとして使用)

SA (Syntagme adjectival) = 形容詞句

SP (Syntagme prépositionnel) = 前置詞句

(16) の例のように、形容詞の Gr.A. は基本的には名詞の Gr.A. に統合される。特に形容詞が名詞の前にある場合は、形容詞は必ず名詞の Gr.R. に統合され、図2の2のレベルの結節でなければ、Gr.R. は成立しない。

実際の発話における Gr.A. の連結には、構文以外にも発話時の条件など多様な要素が関係する。詳細は後日教材の形で、具体的な例文の Gr.A. および Gr.R. の扱いの解説をまとめることとして、ここでは Gr.A. の Gr.R. への統合の一般的な基準の提示に止めておく。

## V. 具体的な指導の原則

F. Wioland (1983) は、自由な発話について、平均的な Gr.R.の音節の数は2.5であると報告している<sup>41)</sup>。確かに Gr.A.のレベルで見れば上記(13)に挙げたうちには3音節を越える Gr.A は存在しない。初学者の練習用の材料としては3音節が適当な長さであると言えるだろう。しかし、たとえば、初学者を対象とした教材の始めに頻繁に見られる“Vous vous appelez comment?”は6音節である。また、上記(13)の例を、Gr.A.の長さに区切ってしまうと非常に発音しにくい。実際には、特殊な状況でない限り、“/”で示したヶ所を Gr.R.の境界として発音するであろう。練習の始めは、まず Gr.A を正確に認識し、Gr.A.の単位でのリズムを体得すべきであろう。しかし練習の目標は、あくまでも実際の平均的な Gr.R.の単位で繰り返せることに置くべきであろう。学習者がフランス語の発音に慣れた段階では、できるだけ将来実際に役立つ基礎を習得させたいものである。

練習の材料としては、例えば、P. Delattre の古い発音練習教材に以下のようなものがある。

(17) J'ai deux chats.

J'ai deux chats / comme cette chatte.

J'ai deux chats noirs / comme cette chatte grise.

J'ai deux beaux chats noirs / comme cette belle chatte grise.

この練習は、次第に Gr.R.を長くしていくことでリズム感を体得させることを目的としている。この教材は、発音の授業で実際に使われているが、3行目位から生徒がテープに着いて行かれず、思わず笑い出す。すぐには繰り返せるようにはならないが、しばらくの間、楽しく練習をしているうちに、標準的な Gr.R.の長さで繰り返せるようになる。

また以下の例のように、数字でリズムを把握したあと、同じ音節数の単語や語群を繰り返す例もあり、これも効果の高い練習方法である。

(18) un, deux, trois, vendredi

un, deux, trois, mercredi

少々長い文でも、無理のない段階的な練習をすることで、初学者でも繰り返すことができるようになる。最終の到達目標は常に理想に限りなく近いレベルに置くことで進歩が約束されるの

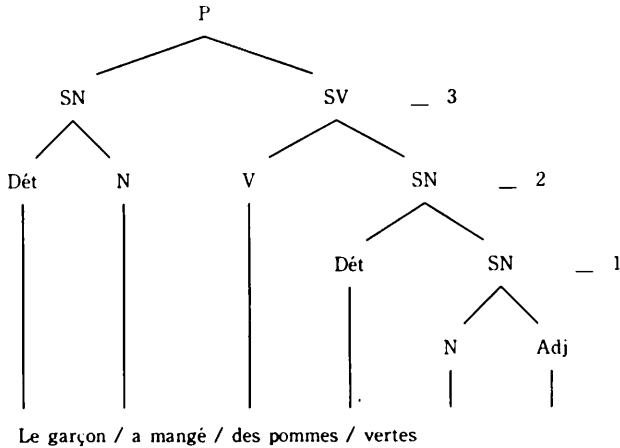
ではないだろうか。

注

- 1) N. Ruwet (1967) p.51 “Cet accent assure essentiellement une fonction démarcative.”
- 2) 特に日本語の文の構造と韻律の関係に関しては、音声文法研究会の『文法と音声』が注目される。
- 3) 英語を原点とする用語については、田中春美、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、樋口時広（1997）『言語学入門』大修館書店、井上和子・原田かづ子・阿部泰明（1999）『生成言語学入門』大修館書店を主に参照した。
- 4) F. Carton (1974)
- 5) N. Ruwet (1967), M. Grevisse (1975) N. Derivery (1997), F. Argod-Dutard (1996)
- 6) M. Grevisse (1975)
- 7) M. Grammont (1971)
- 8) N. Derivery (1997), F. Argod-Dutard (1996)
- 9) F. Wioland (1983)
- 10) M. Grevisse (1975), F. Argod-Dutard (1996)
- 11) F. Dell et al.(1984)
- 12) P.Léon (1997), M. Grevisse (1975)
- 13) M. Grevisse (1975, 10<sup>ème</sup> éd.)
- 14) この例文は、B. Malmbert (1971) が、D. Hérault, R. Moreau (1967) ”La linguistique quantitative (Revue de l’enseignement supérieur, 1-2, 113-127 から p.200に引用したものの。
- 15) 「意味」の定義は、井上和子他の解説「ソシユールの意味での音と意味の恣意的な結びつき」を借用しておく。
- 16) P. Léon (1997) pp.30-31 “Rappelez-vous (voir pp.30-31) qu’il arrive, dans un groupe sémantique long, que l’on mette un accent secondaire sur un mot plein non final. Cet accent est alors moins marqué que l’accent principal.”
- 17) アクセントは強勢アクセント (accent d’intensité) と強調アクセント (accent d’insistance) の2種類に分類される。Gr.R.の切り方に直接関係するのは強勢アクセントである。
- 18) P. Fouché (1959) p.55 (LV) “L’accent d’intensité consiste dans la force plus grande avec laquelle on articule une des syllabes d’un mot ou d’un groupe de mots”
- 19) M. Grevisse (1975) より。アクセントのある部分は大文字で示してあり、発音されない終末母音は ( ) に入れて示してある。
- 20) P. Léon (1997) pp.77-78 “Le rôle de l’accent est donc de découper les énoncés en groupes pas trop longs pour les rendre plus faciles à comprendre.”
- 21) P. Léon (1997) p.51 (LI) “Les uns ne sont jamais accentués dans la chaîne parlée”
- 22) A.J. Greimas (1997) “...les unités de communication traditionnellement reconnues comme porteuses de signification, les lexèmes.”
- 23) J. Dubois et al. (1994) p.275 “Le lexème est pourvu d’un contenu sémique (ensemble de ses sèmes) ou sémème [...] le lexème trouvant sa place dans le lexique”
- 24) B. Pottier (1974)、三宅徳嘉、南館英孝訳 (1980)

- 25) A. Martinet (1970)
- 26) 4品種以外にも核に成りうる語はある。たとえば、代名詞は閉ざされた目録に属す。しかし名詞の代用であるという性格上、開かれた目録への入り口とも言える品詞である。このため、表1のように下位分類によって核になるものとならないものが存在することになる。詳細な分類は今後の検討課題とし、ここではGr.A.の確定に利用できる程度の分類に止めておく。
- 27) M. Rossi et al. (1981) p.268 より
- 28) 付加形容詞と主語の属詞は、Gr.A.の核となるが、Gr.R.のレベルでは基本的に名詞又は動詞のGr.A.と連結され、アクセントを失う。
- 29) 朝倉秀雄 (1967.1993)『フランス語覚え書』白水社より
- 30) たとえば *Il travaille beaucoup* では *beaucoup* が単独でGr.A.の核になるが、*Nous avons beaucoup appris.* では核には成らない。
- 31) A. Martinet-H. Walter (1969)、三宅徳嘉監訳 (1994)
- 32) F. Wioland (1983)、M. Rossi, et al. (1981)、Fr. Dell, et al. (1984)、音声文法研究会編 (1997、1998)
- 33) P. Bhatt (1991)
- 34) ある程度の長さのテキストを音読する際に、意味の単位を認識した上で、それを単位としてプロゾディーが決定される。このような人間の文の把握のプロセスなどが認知科学の分野で次第に明らかになっていく。たとえば漢字熟語の途中でページが変わるように印刷されたものを音読する際に、ページをめくり、意味の単位の終わりを確認してからその熟語を読み上げることを確認した実験の報告がある (定延利之 (2000))
- 35) Syntagme は Saussure の定義 “*toute combinaison dans la chaîne parlée*” では「統合」(プティロベール「言連鎖内における語や記号素の結合をいう」)であり、Martinet の定義 “*On désigne sous le nom de syntagme toute combinaison de monèmes.*” Martinet, (1974) p.112では *synthème* (統合記号素) と対立し「連辞」と訳される。アクセントの位置の考察に関しては接頭語などの単語より小さな単位は考慮する必要がない。従って *syntagme* は樹形図においては「句のラベル (範疇名)」と同意義で使用し、あえて日本語には訳さず *syntagme* のまま使用する。
- 36) F. Carton (1974) p.101 “*Le syntagme semble pouvoir être l’élément que nous cherchons, valable pour tous les usages du français. Mais la difficulté commence quand on veut déterminer avec précision ce qu’est un syntagme, et ses rapports avec l’accent! [...] La division en thème et propos, qui se réfère à la «structure linguistique profonde» (Chomsky), ne peut pas toujours convenir pour l’analyse des structures de surface.*”
- 37) F. Wioland (1983) p.2 “*Comme on peut le constater le plus souvent, mais pas systématiquement, les unités rythmiques correspondent à des unités syntaxiques de différents niveaux. En passant en revue les structures syntaxiques minimales du français, on peut, en effet, observer cette concordance.*”
- 38) M. Rossi, et al.(1981)
- 39) この図の句のラベルに使用している記号は、英語や日本語の文献で使用されているものとの関係が紛らわしいが、引用との整合性確保の為にフランス語の文献で一般に用いられている略号を使用する。

40) 最も一般的な樹形図は以下のように SN をまず Dét/SN とに分けるが、GA を手がかりとするためには、Dét と N が常に同じ結節に支配されている必要がある。本稿では M. Rossi ら、(1981) p.293の方式に習い、図 2 の形にした。



41) F. Wioland (1983) p.2 “Le locuteur génère spontanément des unités rythmiques moyennes de 2.5 syllabes par unité rythmique pour un ensemble de plusieurs heures de conversation, y compris les hésitations vocales.”

### 文 献

- BHATT Parth (1991) “La ponctuation orale Sémiolinguistique du discours” Canadian Scholars’ Press.
- CARTON Fernand (1974) “Introduction à la phonétique du français” Bordas.
- DELL François et al. (1984) “Forme sonore du langage” Hermann.
- DERIVERY Nicole (1997) “La phonétique du français” Seuil.
- DUBOIS Jean, GIACOMO Mathée, GUESPIN Louis, MARCELLESI Christine, MARCELLESI Jean-Batiste, MEVEL Jean-Pierre (1994) “Dictionnaire de linguistique et des sciences du langage” Larousse.
- DUBOIS Jean, LAGANE René (1973) “La nouvelle grammaire du français” Larousse.
- DUCROT Oswald, Shaeffer Jean-Marie (1972, 1995) “Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage” Seuil
- FOUCHE Pierre (1959) “Traité de prononciation française” Librairie C. Klincksieck.
- GRAMMONT Maurice (1966) “La Prononciation française - Traité Pratique” Librairie Delagrave.
- GRAMMONT Maurice (1971) “Traité de phonétique” Librairie Delagrave.
- GREIMAS A.J. (1997) “Sémantique structurale Langue et langage” Larousse.
- GREVISSE Maurice (1975, 10ème éd.) “Le Bon Usage” Duculot.
- LEON Pierre (1997) “La prononciation du français” Nathan université.
- MALMBERG Bertil (1971) “Les domaines de la phonétique” Presse Universitaires de

France.

MARTINET André (1970) "Eléments de linguistique générale" Armand Colin.

MARTINET André, WALTER Henriette (1969): アンドレ・マルチネ『言語学事典』, 三宅徳嘉監訳, 大修館書店, 1994

POTTIER Bernard (1974) "Linguistique générale - théorie et description" Klincksieck.

ROSSI Mario, DI CRISTO Albert, HIRST Daniel, MARTIN Philippe, NISHINUMA Yukihiro (1981) "L'intonation (de l'acoustique à la sémantique)" Klincksieck.

RUWET Nicolas (1967) "Introduction à la grammaire générative" Plon.

WIOLAND François (1983) "La rythmique du français parlé" Publication de l'I.I.E.F (Institut International d'Etudes Françaises).

朝倉秀雄 (1995, 1998) 『フランス文法辞典』白水社

朝倉秀雄 (1967, 1993) 『フランス語覚え書』白水社

井上和子・原田かつ子・阿部泰明 (1999) 『生成言語学入門』大修館書店

音声文法研究会編 (1997, 1998) 『文法と音声』くろしお出版

定延利之 (2000) 『認知言語論 A Cognitive Study of Language』大修館書店

田中春美、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、樋口時広 (1997) 『言語学入門』大修館書店

三宅徳嘉、南館英孝訳 (1980) 『一般言語学 一理論と記述一』岩波書店